

# 令和8年度 学校推薦型選抜（地域指定）

## 小論文

## 試験問題

\*\*\*\*\*

### 注意事項

1. 監督者の指示があるまで、試験問題を開いてはいけません。
2. 試験問題と解答用紙は別になっています。
3. 試験問題は表紙を除いて8ページ（下書用紙を含む）、解答用紙は4ページとなっています。落丁、乱丁及び印刷不鮮明な箇所等があれば、すぐ申し出てください。
4. 監督者の指示に従って、解答用紙すべてのページに受験番号を必ず記入してください。氏名を記入してはいけません。
5. 解答に字数制限がある場合、句読点は字数に数えます。
6. 解答用紙は持ち帰ってはいけません。試験問題は持ち帰ってください。
7. その他のことについては、監督者の指示に従ってください。

（ 8枚の1 ）

1 次の文章を読み、以下の問いに答えなさい。

そもそも、低下したとされている「学力」とは、何を指しているのでしょうか。

「学力って、試験の点数のことでしょう」と答える人がたぶんほとんどだと思います。ほんとうにそうでしょうか。「学力」というのは「試験の点数」のことなのでしょうか。わたしはそうは思いません。

試験の点数は数値です。数値ならば、他の人と比べたり、個人の経年変化をみる上では参考になります。でも、学力とはそのような数値だけでとらえるものではありません。

「学力」という言葉をよく見てください。訓読みをしたら「学ぶ力」になります。わたしは学力を「学ぶことができる力」、「学べる力」としてとらえるべきだと考えています。数値として示して、他人と比較したり、順位をつけたりするものではない。わたしはそう思います。

（中略）

「睡眠力」や「自然治癒力」というものも、同様のものだと思います。どんなときでもベッドに潜り込んだら、数秒で熟睡状態に入れる人は睡眠力が高いといえるでしょう。この力は健康維持のためにもストレスを軽減する上でも、きわだって有用ですが、睡眠力を他人と比較して自慢したり、順位をつけたりすることはふつうしません。怪我をしてもすぐに傷口がふさがってしまう自然治癒力も生きる上では、おそらく学力以上に重要な力でしょうが、その力も他人と比較するものではありません。わたしは「学力」もそういう能力と同じものではないかと思うのです。

「学ぶ力」は他人と比べるものではなく、個人的なものだと思います。「学ぶ」ということに対して、どれくらい集中し、夢中になれるか、その強度や深度を評するためにこそ「学力」という言葉を用いるべきではないでしょうか。そして、それは消化力や睡眠力と同じように、「昨日の自分と比べたとき」の変化が問題なのだと思います。昨日よりも消化がいかどうか、一週間前よりも寝つきがよいかどうか、一年前よりも傷の治りが早いかどうか。その時間的変化を点検したときにはじめて、自分の身に「何か」が起きていることがわかります。もし「力」が伸びているなら、それは今の生き方が正しいということですし、力が落ちていれば、それは今の生き方のどこかに問題があるということです。

人間が生きてゆくためにほんとうに必要な力についての情報は、他人と比較したときの優劣ではなく、「昨日の自分」と比べたときの力の変化についての情報なのです。そのことをあまりに多くの人が忘れてしまうので、ここに声を大にして言っておきたいと思います。自分の力の微細な変化まで感知されている限り、わたしたちは自分の生き方の適不適を判定し、修正を加えることができます。

（出典：内田樹『街場の読書論』潮出版社、2018年）

（ 8枚の2 ）

問1 本文の内容を200字以内で要約しなさい。

問2 筆者がいう学力への賛否を示したうえで、小学生の学力と教員の役割についてあなたの考えを400字以内で述べなさい。

**2** 次の文章を読み、以下の問いに答えなさい。

総合<sup>1</sup>は、世界中の人・物・事は自分と関係があると考え、すすんでより深く本質的な関係を取り結ぼうとするなかで、結果的に人生や世界からの問いかけ、呼びかけに気づき、それらをわがこととして引き受け、自分自身、さらには共に生きる他者との協同の中で、より納得のいく応答のあり方を求めて問いを発し、どこまでも考え抜こう、一生涯考え続けようとする子どもを育てようとしているのだと思います。総合には、そういったある種の重さが伴う。学習指導要領でも「自己の生き方を考えることができる」と目標に掲げているくらいですから、重くなるのは当然ではあるのですが。

でもその一方で、そうした学びを具体的な授業やカリキュラムとして生み出す際の方法論、総合の教育方法は実に軽快で明るい。基本的には、子どもたちの「楽しみ事」を出発点としますから。総合では、子どもたちがやってみたいことに存分に取り組むのが定石の一つです。

例えば、「自分たちで作ったお米や野菜を使っておいしい料理を食べたい」といったことから始めてもいい。そんな楽しみ事でも実際にやっていくと、土づくりや肥料はどうすればいいか、農薬はどうするか、といったさまざまな問題が自ずと立ち上がってきます。それを引き受けて、自分たちで問題解決していくのです。例えば、土づくりのことを農家に聞きに行ったら、畑の土に石灰を混ぜたほうが良いと教えてもらうのだけど、最後におばあちゃんが「昔は石灰なんかまかなくてもよかったんだけどね」とぼそっと言った。それが気になった子どもが「なぜだろう」と思って調べてみると、土壌の酸性化の問題に行き着く。そこから環境問題の学習に展開したりするわけです。私はこれを「子どもも歩けば問題にあたる」と言うのですが、大事なことは子どもが自分の足で歩くことです。だからこそ、まずは彼らの楽しみ事から始めるのがいい。楽しみ事であれば、歩くのも苦にならないですから。

ちなみに、この子たちは別に酸性雨のことを勉強しようと思ったわけではありません。でも野菜を育てるのには良い土がいる。この身近で切実な問題を解決しようとするなかで、酸性雨の問題に出合ってしまった。ここで子どもという存在がステキだと思うのは、それを真っ正面から身体全体で引き受ける。間違っても「酸性雨のことなんて調べなくても、要は石灰をまけばいい土ができて、おいしい野菜が採れるんでしょう」とは言わない。大人はそう考えるかもしれないし、そのほうが野菜作りという当初の問題を効率よく解決するには得策だけれど、子どもは必ず引っかかる。世界からの問いかけに気づいて、立ち止まり、引き受けるのです。「私の問い」であった野菜作りをいったん脇に置いてでも、目の前に現れた問いを引き受け、それに応答しようとする。（後略）

※1 ここでは、総合的な学習の時間を指す。

（出典：奈須正裕、諸富祥彦『答えなき時代を生き抜く子どもの育成』図書文化社、2011年（一部改変））

- 問1 本文の内容を200字以内で要約しなさい。
- 問2 「子どもも歩けば問題にあたる」ことをどう考えるか。それをふまえ、小学校の児童が問題にあたり立ち止まったとき、どのように対応していきたいか。具体例を挙げ、あなたの考えを400字以内で述べなさい。